「第１回関東ブロック クラブ育成推進協議会」開催報告

日時:平成 17 年 9 月 30 日(金)14:00～18:00
場所:岸記念体育会館 理事･監事室(渋谷区)

平成 17 年度第1回関東ブロッククラブ育成推進協議会が、9 月 30 日、岸記念体育会館において開催された。当日は、関東ブロック8都県からクラブ育成アドバイザー、体育協会関係者、そして関東ブロック地方企画班員らあわせて20余名が参加し、今後のクラブ育成に向けた意見交換と討議を行った。

日体協クラブ育成課の根本光憲課長からの開会あいさつののち、さっそく 12 月 10 日に開催が予定されている第2回関東ブロッククラブ育成推進協議会の打ち合わせについて開催要項案をもとに行った。メインプログラムとなるテーマ別分科会の運営方法等については、できるだけ参加者の希望･意向を反映するようなグルーピングとするよう申し合わせた。

グループミーティングについて

その後のグループミーティングでは、参加者がA、B2つのグループに分かれ、クラブ育成アドバイザーあるいは体協の担当者として活動するなかで、直面している問題や困っていること、知りたいこと等について議論が交わされた。

松澤淳子班員(関東ブロック地方企画班)が進行役を務めたAグループでは、まずクラブへのヒアリングに際して、アドバイザーとしてどのようなスタンス(関わり方)をとるべきかについてさまざまなケースが報告され、市町村訪問におけるアポイントメントの取り方、接触のタイミング、「～はどうですか」という質問や「～したらどうでしょうか」という提案、言葉の投げかけを心がけているといった報告がなされた。

各都県でクラブをめぐる状況が異なるため、一律に対応することはできないものの、基本的な方向として、メンバー自身で考えてもらえるようにするための働きかけやサポートの重要性が指摘された。ここでの体協担当者の役割は、アドバイザーと密接な連絡を取りつつ、アドバイザーの活動が円滑に行われるよう支援をしていくことである。

次に、NPO 会計ソフトに関わる支援については、説明会開催、業者による対応、テキスト熟読の要請、他のクラブ･ネットワークを利用したノウハウ共有などの案が出され、多面的かつ継続的な支援が必要との認識が示された。

続いて、「クラブを必要としない地域」へのどのようなアプローチをすればよいかという問題については、目先の問題ばかりではなく「未来の地域とスポーツ環境をつくるのだ」という考え方に転換せねばならないこと、またクラブそのものに対する「理解」や「関心」のレベルを高めることが必要であるという意見が出された。

最後に、委託金が切れた後に体協が支援を行うにあたって留意すべき点について討議を行ったところ、やはり財源確保が大きな課題になるだろうとの見通しから、事業ごとの会費や参加費の設定（収入）、指導者謝金の設定（支出）などについてクラブへの根本的な意識づけが重要になるとの考えが示された。「受益者負担」の考え方を、「費用の自己負担」という意味にとどまらず、「負担＋運営協力」という意味で理解・浸透させることは、このような財源確保の問題と結びついているという指摘もあった。

小出利一班員（関東ブロック地方企画班）が進行役となったBグループでは、日常的なアドバイザー活動において経験したこと、普段感じているさまざまな問題点をもとに、あらためてアドバイザーの役割について意見交換をおこなった。

ここでは、まずクラブ設立前と設立後、それぞれの支援方法について参加者からの報告があり、そのなかでメンバーからクラブ連絡協議会、クラブサミット（事例報告・討論）など、クラブレベルでのコミュニケーションの機会をつくっている事例などが報告された。各クラブがもっている情報・ノウハウの共有化やクラブマネジャー間の悩みごとの共有化は、クラブ運営にあたって非常に大切なものであり、今後、クラブ間のコミュニケーションを活性化するような場づくり・機会づくりに期待する声が多数聞かれた。

さらに、アドバイザーの役割は、求めに応じて情報を提供することだけではなく、このようなクラブ間の相互作用（コミュニケーション）のしくみづくりにもあるのではないかという意見もあった。設立後の支援についてもさまざまな意見が出された。クラブの育成支援というと、一般には「創設」までの段階と理解されており、「立ち上げたら支援は終わり」と認識されているきらいもあるが、創設・設立後の継続的なサポートについては、あまり情報・研究が多くないので、今後のクラブミーティングや中央企画班等で積極的に取りあげてもらいたいという要望があった。

クラブ支援のためのアドバイザーの役割は、コミュニケーションの支援、資金調達の支援、組織間関係づくりの支援、つぶれないためのサポート、次世代の人材づくりなど、その内容も方法もきわめて多岐にわたるが、個々の支援のテクニカルな部分ばかりに目がいくと、いったい何のための支援なのかが見えなくなってしまい「木を見て森を見ず」ということにもなりかねない。したがって、アドバイザーや体協関係者は、いったい何のための支援なのか（原点への回帰）をつねに頭の片隅に置きながら対応していく必要があるのではないか（例えば、支援を「自立のための支援」と理解すると、クラブの「自立」の状態が支援の目標となり、なすべきことが自ずと明確になる）。

このほか、クラブ関係者や市町村関係者にアドバイザーの存在が知られていないこと、思いのほか認知度が低いという現状についても問題提起がなされ、何らかの対応が必要であるとの意見もあった。

最後に、関東ブロック地方企画班の福澤文雄班長から閉会あいさつがあり、第1回クラブ育成推進協議会は幕を閉じた。　（報告：作野誠一　関東ブロック地方企画班員）